

# アイヒェンドルフにおける「保守」の意味

大 谷 恒 彦

## Über den Sinn des Konservatismus in Eichendorff

Eichendorff ist einer der europäischen Konservativen, der sich selbst von Reaktionen bewusst unterscheidet.

In Eichendorffs Schriften zeigt sich diejenige Haltung, die alte Tradition nicht ohne weiteres verleugnet. Aber, andererseits erklärt sich Eichendorff nicht für die Haltung, die ergebenst am Alten sich festhält. Bei tiefer Bindung an das Alte vermochte er keiner Bestrebung zustimmen, die das Alte nicht in Beziehung setzte zur geschichtlichen Gegenwart.

Eichendorff kritisiert scharf die Adel, die im starken Strom der Zeit nur blindlings die Konvention halten und auf den ehemaligen Zustand beharren. Eichendorff schliesst die Freundschaft mit vielen, die zur romantischen Schule gehört, die romantische Schule übt ihren starken Einfluss auf ihn. Aber Eichendorff übersieht nicht ihre Nachteile. Eichendorff weist auf die ungesunde Neigung der Romantik hin, die das Mittelalter für das goldene Zeitalter hält. Eichendorff nennt Fouque den romantischen Donquichotte. Er zeigt, dass ebenso Fouque wie Donquichotte die mittelalterliche Phantasie mit der Wirklichkeit verwechseln. Eichendorff behandelt oft die Gefahr der sogenannten „romantischen Illusion“.

Der Kern von Eichendorffs Bemühung besteht darin, dass das Ewige mit dem lebendigen Neuen sich verbinde.

いったいヨーロッパにおける保守主義とは何かということ的概念的に規定することはきわめて困難だが、反動主義者と自覚的に己を区別する保守主義者の存在を否定することはできない。ヨーゼフ・アイヒェンドルフはこのような保守主義者の系譜にぞくする一人であるとわたしには思われる。

ヨーゼフ・アイヒェンドルフという名は、これまでしばしば „Taugenichts” の作家、現実に対してなんらのかかわりを持たない夢想家というレッテルをはられていた。わたしは以下の小

論において、このような見解で割り切ることがはたして正しいかどうかを、アイヒェンドルフの著書における保守的なものの把握の仕方を検討することによって、問題にして見たい。

アイヒェンドルフの著書には、過去の伝統を、それが単に古いからという理由だけで頭からしりぞけようとするのは誤りであるとする態度が一貫してあらわれている。

「ゴットシエツトとハンスヴルスト」<sup>1)</sup>のなかで、アイヒェンドルフはつぎのようにのべている。「ともかくたんなる破壊は、その代りに与

えるべきより賢明なことがらが存在しない場合には無意味である。」

更に、「<sup>2)</sup>奇蹟劇から謝肉祭劇へ」の中で、アイヒェンドルフは、謝肉祭劇が、根本的には、中世を偉大ならしめたもの、すなわち騎士精神、勇氣、宗教等の否定であり、言いかえれば、中世の墮落の象徴であるとする見解をのべた後につぎのように結論づける。「<sup>3)</sup>それ自体が病気であるたんなる否定からは、決して健康なあたらしいものが生れはしない。」

けれどもアイヒェンドルフは他方において、決して古いものにひたすらにしがみつくことを、伝統を守る態度だとは考えていなかった。

「<sup>4)</sup>生命を持っている伝統と言うものは、それが本当に生命を持っているかぎり、必然的に絶えず形成され続けてゆく。」という言葉はアイヒェンドルフの考えをよく表わしている。

古いものときわめて深いところでつながっているにもかかわらず、アイヒェンドルフは古いものを歴史的な現在と関係づけることをしない、いかなる努力にも同意できなかった。時代の激流の中で、旧態依然たる貴族をアイヒェンドルフはしばしば手きびしく批判する。「予感と現在」のうちでアイヒェンドルフの分身と見られる小説の主人公フリードリッヒは、舞踏にうつつを抜かしている貴族に対してつぎのように感想をもらしている。「自身で真剣にたちなおらないものが滅亡せねばならぬこの力強く迫ってくる時代において、もしもこのことだけが依然として貴族の唯一の楽しみかつよりどころであるなら、神よ貴族をあわれみ給え。…」

デュランデ城の中で、大衆の反抗の動きをくいべつし、銀の燭台の前で、歴史書に読みふけている老デュランデ伯は、「<sup>5)</sup>かざられた死体のよう」だと形容されている。

時勢の動きから何ものをも学ぼうとしない反動主義者の典型をアイヒェンドルフは、「Die Zeit will nur Prügel haben, weiter ist's nichts」というエーベルトシュタイン男爵の姿のうちにおいて示す。

アイヒェンドルフの作品の中で、しばしばあらわれてくる城が焔に包まれて燃え落ちる情景は、貴族の没落を象徴しているものと思われる。たとえば、

「そうする間に夜になった。そしてわたしは、わたしたちの眼前の山上で、無数の城が焼けるのを見た……」

「城は燃えている焔のうちにおける、暗い巨人のようにくずれ落ちた。焔の動きが、良い昔の時代をふまえて、荒い踊りを踏った。……」

「その時すぐその後におそろしいいなびかりがし、大きな響を立てながら古い城がくずれ落ちた。」等の文章が例としてあげられることができよう。

「ロバートとギスカルト」の中にも同様の情景が見られる。

新時代に適應する能力のない無能な貴族に対するしんらつな批判は、「<sup>6)</sup>貴族と革命」のうちに詳細にのべられている。以下その大要を記す。

「大へん高齢の人々は恐らく、まだ幾分かいいわる „gute, alte Zeit” について思い起すことができる。しかしこの時代は実をいえば、„gut” でもなく、„alt” でもなく、昔の良い時代のカリカチュアであった。剣は式刀になり、兜は尖ったかざらになり、城主は退職した、驃騎兵となった。かれは、かれの祖先がそこから、かつて通行する貿易商を強奪した其の当の別荘で、工業家たちに取りかこまれ、だんだんと狭く押し込められていった。それは一言にして言えば、憔悴しきった騎士の時代であり、おのれの髪のはなはだしい白髪を隠すために、髪粉を振りかけた。この時代はまだ自己満足にふけて美人たちの周囲をはねまわり、かれを世間の人々がもう若くは見ないことを理解しえず、そのために大変感情を害する老人に比較し得る。

貴族はそれまでの姿においてはまったく中世的な制度であった。貴族は完全に封建制度の上にもとずき、この制度の中では太陽系のように帝位という中心の太陽は候爵と伯爵とによって取りまかれ、候爵と伯爵とは、さらに又、かれ

ら自身の月と衛星とをめぐらしていた。家臣と封建領主相互間の宗教的な誠実さは、かの時代のすべての世界的な事件の原動力であり、それゆえ貴族の世界史的な権力と重要性をも形成した。しかし30年戦役という偉大な悲劇は、それがなくとも人間的なものにつきものの老衰に、ずっと以前からなやんでいた貴族を打ちくだいて幕を閉じた。30年戦役は皇帝の理念を取りのぞき、あるいは本質的に異なった方向へずらしたことによって、すべての強固に構成された構造は、その継目から崩れ落ちなければならなかった。理想的な誠実の位置は、ただちに物質的な金力によってしめられた。強力な家臣たちは傭兵を買い、たばをなして盗賊騎士となった。一般的な混乱の中であって、しばしばだれに従っていいかわからなかったより微力な家臣たちは、わりのいい幸運や、分前のいい方の給料に飛びついた。そしてついに波が再びひいた時、驚かされた貴族は、かれが自分自身壮大な国家機構から脱落して、永遠に動いている砂州の上にししかけていることに気がついた。自由な封建貴族から不意に功勞による貴族ができあがり、かれは官廷に行くか、常備軍に登録するかした。……」

アイヒェンドルフが、この文章で、いわゆる“gute alte Zeit”の本質をついていることは注目にあたいする。アイヒェンドルフがこの文章で示している時勢の推移に対する洞察は、歴史の示すいっさいの推移を悪いものとみなし、「進歩」「近代」等の概念をせりつすべきものとみなす反動主義者の態度と無縁なものである。さらに、アイヒェンドルフはおなじ論文の中で、貴族についてつぎのようにのべている。

「貴族は、（それをかって伝統的になった名称で呼べば）、その過ぎ去ることのない特性という点から見て、なお社会の理想的な要素である。貴族はすべての偉大なもの、高貴なもの、美しいものを、それがどのようにして、どこで大衆の中にあられようと騎士的な態度で保持し、たえず変化し得る可能性のあるあたらし

いものを、永遠に存続するものと結びつけ、そしてそのようにすることによってはじめて後者を真に生き得るものにする使命を帯びている。それゆえロマン的な幻想と、久しい以前に時効にかかったものに強情にただしがみつくとだけでは、この際なにごとにもなされ得ない。…」

永遠に存続するものと、たえず変化するものとの関係の把握のうちには、「維持するためには改善する。」(to reform in order to esevre) という古典的なモットーであらわされる保守主義者の心情がのべられている。アイヒェンドルフは上述の文章のうちで、世襲的な貴族を見かぎり、かって貴族が理想としたものを守るという思想をのべている。これはアメリカのジョン・アダムスが、「…私が貴族というのは、特別に一人の世襲的な貴族やだれか特に限定する人を意味するのではなくて、人類の中の自然な現実的な社会を構成している。」とのべたのと本質的には、おなじ思想と思われる。急進主義と反動主義とのいずれに対しても批判的なアイヒェンドルフの態度を具体的に示した論文として、「政治書簡」と、「プロイセンと憲法」がある。

「政治書簡」は、手紙の形式を取っているが、手紙の書き手である「わたし」は友人に、興味のあるエピソードを思い起させる。かって、この友人は、一人の男の“Hier will ich's aufbauen-Kraft-Freiheit-Millionen-beglücken”というときれの言葉を耳にして、この言葉を口に出した男の胸に感激してすがりつく。

しかし男のいう Kraft とは Wasserkraft の意味にはかならず、自由とは、地主としての自分の土地に対する自由を意味し、何百万という言葉でかれは、何百万と投資した資本のうち何パーセントがおのれに利益をもたらずかを考えたのであった。

アイヒェンドルフは、このエピソードで、現在の憲法を要求し、権利の保証を主張する勢力の核心は、自由という仮面をかぶったブルジョアであるという見解を表明する。

二院制度によって、代議員によって国民の利

益を確保する主張は、アイヒェンドルフによればイギリスの影響がある。アイヒェンドルフによれば、イギリスではノルマン人がアングロサクソン人に対して勝利をおさめ、ノルマン人の君主、特にジョンは王政の原則を徹底した専制政治の形にした。これは、自然の反動によって、さしずめ貴族的な要素に生命を与え、貴族たちの同盟はジョンからマグナ・カルタを奪った。この要素はさらに又すみやかに寡頭政治になり、エドワードは貴族の力をそぐために下級貴族及び、都市の代議員を議会に召集し、そうすることによって第三の民主主義的な要素を法的に構成した。しかしまもなく民主主義的な要素が独裁的になり、血と革命とを呼びおこしたので、「権利の宣言」によって、民主主義的、貴族主義的、王政的な三つの要素は、はじめて宥和された。

さて、進歩派の見解によれば、二院制度の場合、上院に理念的には、疑問の余地なしに、*stabile* (安定したもの)を代表すべきである。上院は歴史的な追憶のみにない手、榮譽、たしかな自己感情、品位と自主的な見解の保持者である。他方下院は、国民の知性の代表者となる役割をおびており、それゆえたえず前進するもの、永遠に動いてゆくものの代表者であり世論の力にささえられるべきである。

けれども、アイヒェンドルフによれば、二院制をドイツに急いで適用する時機はまだ熟していず、二院制を強行すれば、イギリスがかって経験したような混乱をひき起すおそれがあるとされる。アイヒェンドルフは、機械的な自由の概念を累進的な進歩より尊重するようなことをしてはならず、憲法をつくってもそのささえとなる保証がない場合、憲法の紙の保証は銃剣で無効にされる可能性があり得ると主張している。

この論文でアイヒェンドルフはドイツのブルジョアの欠陥を鋭くついている。大衆の中にしつかりと根をおろしていなかったブルジョアの政治運動がドイツの各地で圧殺され、「銃剣」

で無視されたことは、アイヒェンドルフの予言している通りである。

論文「プロイセンと憲法」のうちで、アイヒェンドルフは、現代は過渡期であって、大衆は過去に目を向けていいか、未来に目をむけていいかを決しかねていると時代に対する見解をのべた後に、左右両派の見解を要約し、それに対して自己の批判をのべている。

まず、アイヒェンドルフによれば、右派は救いをただ古いものの回復ということに見出し、個人の自由を求めるあらゆる努力を解体にみちびく謀叛と見なす。

かれらの教義はつぎのドグマに要約される。

すなわち、国家におけるあらゆる権力は神にもとづくものであり、したがって神のように必然的に絶対な単一体であって、上から、いわば神的な啓示として、すべての特殊なものにはじめて権利と意義と方向とを与え、すべての個人に代表派けんの手段を通じてはじめて価値を与える。

この主張に対してはアイヒェンドルフの立場からつぎのように反論される。

1. 歴史全体は本来、ひきつづいてる啓示であるから、あらゆる事実上の権力(たとえば共和性)の根源をなしている神性について主張する立場もありうる。

2. 死んだ部分のよりあつまりは決して生きた全体を形成せず、したがって真の統一はただ個人の独自の自由のうちに、その真の自由、意義と力とを持ち得る。

3. 個人の生命も民族の生命も決して静止ではなく、まさしく生命を持っているがゆえに、たえず変化する継続的な新生である。それゆえに、偉大なくさりの一環としてのみ相対的な価値を持つ何らかの歴史的な状態を永遠の規範として固持しようとするのは、冒瀆とまではいえなくとも、すくなくともむなしい行為であろう。ティークの *Zerbino* におけるようにこの世界に演ぜられる劇は、場面を押しもどそうとする右派の意向にもかかわらず進行してゆく。

他方、アイヒェンドルフによれば、左派は、前代と伝統とを無視し、まったくあらためて世界を創造するのが眼目であるかのように、無造作に、すべての個人を一つの主権を持つ権力として総括し、任意の人間に、必要な秩序を保つための最高権力として全権を与え、この人間に文書で権利の保証をさせる。

この見解は、必然的に、まさしく時代の変わるものと、波動を表現するあらゆる自由な個人の総和が、それ自体としてすでに単一体であり、しっかりとした基盤であるとする、根本的な誤謬になやんでいる。この秩序においては、結びつける愛のかわりに、分離させる疑惑が生命の原理となる。

二つの体系は根本においてたんに否定的である。左派は自然法の名においてすべての既成のものを引き倒そうとし、右派は二度と生命を吹き込まれ得ない過去のちりあくたの上にすこしも新しいものを建設しようとしないうのがアイヒェンドルフの結論である。

それではアイヒェンドルフ自身の考え方はどうか？

アイヒェンドルフによれば、真の解決はこの二つの意見のいずれとも異った中庸の道を見出すことにある。

ここでアイヒェンドルフの言う中庸とは、機械的な折半を意味するものではなく、神の恵みを受けた統治者が争いを超越した指針を求めた高みを意味する。

アイヒェンドルフによれば、現在の争いには二つの強力なエレメントが基盤として存している。一方のエレメントは自由を求める衝動であり、これに変動、栄誉、諸国民の特殊性に基づく。他方のエレメントは、ふるさとに対する愛着という自然な感情であり、これに、人間の胸における静かで敬虔な満足である誠実と従順とが基づくとアイヒェンドルフは主張する。

この二つのエレメントはアイヒェンドルフによれば権利と義務、求心力と遠心力とのように、おたがいに戦いながら相手に対するおぎな

い手の役割を果たして、より高い世界の秩序を形成するのにあずかるべきものであると考えられる。

さらに、ドイツが諸部族に分れているからこそいきいきとした統一を保っているという見解をのべたのちに、アイヒェンドルフは憲法の本質についてつぎのようにのべている。

「…憲法というものはこしらえあげられるものではない。なぜなら恣意は恣意であるままであって、どのような方向からやってきても不幸をもたらすから。…」

「…あらゆる憲法はその国土と国民とに対する一致の度合によってその相対的な価値を有する。…」

「…どのような憲法もそれ自体を保証するものではない。…」

憲法が国土と人民とに根をおろしたものであるということを前提とするかぎり、左右両派のいずれの憲法にせよ絶対的な価値を主張しえないとする思想が、上に引用した言葉に誤解の余地なく明瞭にあらわれている。

保守的なものに対するアイヒェンドルフの思想を考えるのにあたって、言及しなければならないのは、アイヒェンドルフのロマン派に対する態度である。アイヒェンドルフは、青年期のオットー・フォン・レーベンとの交友関係をはじめとして、ロマン派のうちに多くの友人・知己をもち、すくなくならずロマン派の影響を受けた。しかし、このことはアイヒェンドルフがロマン派の思想を無条件で受け入れたことは意味するものではない。成熟した後のアイヒェンドルフの著作にはロマン派の思想と、キリスト教の本質とは異質なものであるとする考え方が明瞭にあらわれている。

アイヒェンドルフは、<sup>9)</sup>「ドイツにおける近代のロマン派文学の倫理的乃至宗教的意義について」と題する論文の序文のうちでつぎのようにのべている。すなわち、

文学はロマン派をカトリック教会の門前、森のしげみのうちに隠されて、ながらく忘却され

ていた聖所の前へと導いた。

それゆえ、かれらがすくなくともなかばは倫理的なかれらの使命を、審美的なもののみなし、可視の生きている教会の代りに、夢みるような薄明のうちで、この教会のたんなる詩的なイメージ、あたらしいキリスト教的な神話で満足しようとしたことは、なんらおどろくにたりない。

さらに、おなじ論文の結びの箇所では、ロマン派が宗教、政治、家庭、教育のあらゆる分野にあって唯理主義をおいはらった点にその功績を認めたのちに、つぎのようにのべている。

「かれらはもとより絶対的なものを求めたが、正統的な熱心が動機ではなく、神秘なものと霊妙なもの、絶対的なものをめぐっている後光が動機を与えた。かれらは異教の神話の代りに、キリスト教的な神話を与えた。一言にして言えば、かれらは根本的には、自分自身のうちに持っていない信仰を弁護してたたかった。」

「18世紀のドイツのロマンのキリスト教に対する関係」のうちの1章「<sup>10)</sup>審美的キリスト教と反キリスト教」のうちでアイヒェンドルフは、「ロマン派のカトリシズムは、本質的には審美的な宗教である」と断定する。

このようにキリスト教を審美的な視角から見る立場の典型として、アイヒェンドルフはアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの言葉をあげている。すなわち、

<sup>11)</sup>「わたくしはおろかな頭脳の持主の浅薄さと狭量さに対して反撃をこころみ、感覚主義的な哲学を、その浅薄なモラルとあわせてにくんだ。わたしの友人たちと一しょに、わたしは中世の追憶を生かし始めた。そしてプロテスタンティズムが私には何物をも提供しなかったから、わたしはローマ教会の伝統からくみ取らねばならなかった。わたしは宗教的なソネットを書いた。このことは芸術的な偏愛を示した。わたしはカトリック教会の典礼にしばらくのあいだ魅惑された。……」

アイヒェンドルフが典型的なロマン派の代表

人物と見なしたノヴァーリスのうちにおけるキリスト教的なものとの混合をアイヒェンドルフはつぎのようにくわしくのべている。

<sup>12)</sup>「…ノヴァーリスは、かれの時代のすべての高貴な心情の持主と共に、ヨーロッパにおける精神的な生活の、唯物論的な、致命的な弛緩をなげく。この墮落の原因として、かれは諸国民の宗教からの感激なしの離反と、信仰と知識とのかたよった対置をみとめる。この離反をノヴァーリスは、宗教改革によってきりひらかれ、プロテスタンティズムにおいてかたちづけられ、ゆるがぬものとされたとする。……」

ただ真の宗教、すなわちカトリック教会への帰還のみが救済と再生とをもたらしうる。……

けれどもこの再生を求める期待は、かの根本的に散文的な意向が生命を抑圧している限り不可能なことである。さらに、悪はただその反対によってのみ排除される。すなわち必然的とみとめられた教会に帰還することは、ただPoesieをなかだちとしてなしとげられる。……」

ノヴァーリスは詩の精神をもってあらゆる時代、階級、科学、状況をふみこえて、世界を征服しようとした。

さて、アイヒェンドルフによれば、キリスト教の超人間的な内容は、知性によっても、心情によっても近づくことができず、ただ信仰によってみ近づき得る。したがって文学はキリスト教の本質とは同一視できない。しかるにノヴァーリスにおいては、しばしばキリスト教はたんなる文学に解消すると。

ノヴァーリスにおいては、懷疑と至福を求める予感、教会的な信仰とほとんどおおわれない汎神論とが共存する。ノヴァーリスは自分自身と決着がつかず、たえず真理を懷疑において、懷疑を真理においてぎんみすると。アイヒェンドルフは、ロマン派の中世を黄金時代視する態度のうちひそむ不健康な性格を見のがさなかった、アイヒェンドルフは、フーケをロマン派のドン・キホーテとのべて、ドン・キホー

テと同様、フーケが中世的な幻想を現実と見なしたことを指摘し、さらにフーケのロマンが騎士の礼儀作法をしるした本という印象を与えるとのべる。アイヒェンドルフは、ノヴァーリスのように中世を„echt-katholisch“であるとは言い切らない。アイヒェンドルフは„romantische Illusion”（ロマン派的幻想）のもたらす危機をよく知り、この言葉をよく使用した。

「予感と現在」のうちには、過去に恋々としている弱々しいロマン派を批判するつぎの箇所がある。

「わたしには、泣き出しそうなソネットで昔の良い時代をすすり泣いて取りもどそうとし、藁火のように、悪いものを改めることをなすえず、良いものを照らしあためることもなすえない、あのつきることのない訴えは、特に死にたいほどいとほしい。…わたしがわたしの生きている時代よりもすぐれているという気持を持たなければ、わたしは歯がみをして侮辱を受けるだろう。なぜなら、どんな時代も完全に悪くはないから。…」

おのれの信条、乃至主義とことなる者に対する反動主義者に特有な閉鎖的な態度はアイヒェンドルフには見られない。アイヒェンドルフはルターについて「英雄的な、完全に大衆的な個性。」とのべている。

ゲーテについては、ゲーテが本質的にキリスト教徒であるとする説と、完全に異教徒であるとする説とをいずれも一面的であるとしてしりぞけ、「わたしたちは如何なるときでも、詩人からかれが与えることができる以上のものを要求したり、詩人の意図をすりかえたりしてはならない。」とのべている。

このような柔軟性をもった保守主義者としてのアイヒェンドルフの特色は、かれのカトリシズムの把握の仕方を理解することによって、よりただしくつかむことができる。

アイヒェンドルフは「<sup>13)</sup>聖ヘドヴィヒ」の中で「どのようにしてわたしたちは現代において聖人となりうるか」という問を投げかけ、この

問に対してつぎのような答えを与えている。

「わたしたちの場合には、鞭打ちや、断食等による肉体的な折檻はほとんどみもりをおさめないか、あるいは決して十分でないであろう。わたしたちは他の悪徳、すなわち、高慢、知識等に対するうぬぼれ等をたち切らねばならぬ。」

アイヒェンドルフによれば、中世的な敬虔の様式は至福にいたるために必要な条件ではなく、愛と謙遜とが今日には必要である。

アイヒェンドルフによれば、今日のキリスト教徒にとって懐疑の風潮は無視できない。したがって今日の課題は中世のようにありあまった感性を抑えることでなく、わたくしたちの内外の世界と精神的に戦うことであると。

この主張には、近代的な聖性のあり方に目ざめ、敬虔の様式を固定したものとは見なさない見解が明らかにされている。

アイヒェンドルフは、中世末期と反宗教改革の時期において、カトリシズムが聖霊から離れたのが教会が墮落した原因だと主張する。

おなじ見解にもとづいて、アイヒェンドルフは宗教裁判をはっきりと、あやまったものとして批判している。

「宗教裁判の秘密裁判……、自己の無力を感じて明るい光を敬遠し、世論に対して持っていたそのうしなわれた権力を、愛と確信というキリスト教的な武器によってではなく、血にそまった斧によって固持しようとする、あの動揺させられた信仰の誤謬。…」

この時期のカトリックの修道会においては、プロテスタンティズムに対する反対のための反対という傾向が見られ、駝鳥が目を閉ざることによって敵からまぬがれていると考えるような精神的な偏狭さがみとめられるとアイヒェンドルフは主張する。

信条を異にしたものに対するひらかれた思考の方法はアイヒェンドルフの実生活にも反映されている。かれはギュンターの哲学にかんする著書を焚書目録に加えることに反対している。

また、アイヒェンドルフは Grätz における

カルヴィン派の<sup>14)</sup> Diaboragemeinde (分離教区)の墓地にたやす金額を捻出するためにカールホルタイが発行した詩集に、晩年のおのれの詩の一つを寄せている。

アイヘンドルフは、かれが „Salonkatholizismus” と呼んだ、カトリック教徒内の微温的な傾向を鋭く批判している。

アイヘンドルフの息子ヘルマン・アイヘンドルフは、アイヘンドルフの伝記の中で、アイヘンドルフの長年の友人のうちには、その宗教的確信が、アイヘンドルフのそれとすどく対立していた何人かのプロテスタントの牧師がいたことをのべている。

アイヘンドルフの上役で、アイヘンドルフの人となりを知っていたシュエーンは、アイヘンドルフのカトリシズムについてつぎのようにのべている。

「かれは理想的なカトリシズムの中にくらしている。そして、このカトリシズムは、完全に高貴な性格の持主であるかれにおいては、おそらく認められ得よう。」

アイヘンドルフは、聖職者の課題を、「存在と知識におけるある種のけがれなき、神の恩寵がまだすべての自己のいさおしをのみつくり直接に働きかけるあのより高次の無邪気さ」を生活の上にあらわし、「いわば天国の永遠の番人兼使者として、地上における郷愁を常にあらたにすること」のうちにとめていた。

アイヘンドルフは、政治的な、党派政治的な、階級的な意味における反動と、きびしく対立し、キリスト教界と、教界の内部における反動的な傾向とも対立した。

カトリシズムを、時代の要請に盲目的な固定した形式でとらえるということに対して、アイヘンドルフは常に批判を続けた。

「もちろん永遠の真理にはけっして進歩がない。けれども、この真理に近づき、それをできる限り把握する仕方には一種の進歩、むしろ移り変りがみられる。」

<sup>15)</sup> アイヘンドルフはウィーンで聖クレメンス

・ホーフバウアーと知りあい、ホーフバウアーに大きな影響を受けた。ホーフバウアーは、その時代の講壇的な神学の意味にあては「無教養」であったが大衆出身の人間の持っている純粋なものと不純なものとをみわける確かな本能、教皇に、ローマで、ドイツ人は敬虔であろうとしたから宗教改革を起したのだとのべる率直さを持っていた。

ホーフバウアーは、まったく「ロマン的な幻想」なしに、フランス革命と、西欧の内的なデカダンスとの間のつながりを見とめた。ホーフバウアーは、ドイツの内的な悲劇と、ドイツにおけるキリスト教の墮落が、将来における人類にとって、最大の政治的かつ精神的な危機をよびおこすとのべた。それゆえ、ホーフバウアーにとっては、ドイツのあらたな、内面的なキリスト教化は、時代の緊要時であった。これは「予感と現在」のフリードリッヒと基を一にする考えである。

ホーフバウアーによって、アイヘンドルフは、世界と人間とを、おかしがたく、聖なるものに方向づけられている人間の目をもって見ることをまなんだ、ホーフバウアーは、現世に対する深いほがらかな愛情を持ち、常に誘惑され、罪におちいつている地上の子たちを愛することをアイヘンドルフに教えた。ロマン派の個人的な友人であったホーフバウアーは、ロマン派を、「幻想なしに」観察することをアイヘンドルフに教えた。

<sup>16)</sup> 「すべての絶対主義 (Absolutismus) は、それが革命の側にあるにせよ、反動の側にあるにせよ、社会的な秩序の側にあるにせよ、反秩序の側にあるにせよ、悪であり、不自然といういとわしい親近性を持つ特徴によって、おたがいに似て見える。……」というアイヘンドルフの言葉は、この偉大な保守主義者の面目を遺憾なくあらわしているものと思われる。

最後に、アイヘンドルフがウィーン及び、オーストリアをこよなく愛したことは、アイヘンドルフの弾力性のある保守主義を考察する



者にとっては見のがし得ない事実である。ウィーンは、アイヒェンドルフにとって、「Mutterstadt」の役割を果していた。1814年12月15日に、アイヒェンドルフはレーベンにあてて次のようにのべている。

「わたしが、愛するオーストリアから離れるということがどれほど内心の戦いをひきおこすかということを君は想像出来よう。…」

1951年にハンス・ブランデンブルクがのべているように、ウィーンは、アイヒェンドルフが生涯もっとも愛した都市であった。アイヒェンドルフは、オーストリアに職を求めようとして運動したが、ついに成功しなかった。

ドイツのカトリシズムに対して鋭い批判を与えたアイヒェンドルフに取って、ホーフバウアーを中心とするグループは、アイヒェンドルフの思考方法にゆたかなみりを与えた。

アイヒェンドルフが、1838年にふたたびウィーンに行った時、かれは完全に変わった状態をみとめた。ホーフバウアーのグループは右派と左派とにわかれた。右派は政治に首をつっこみ、メッテルニヒの体制と緊密に結びつき、メッテルニヒから財政上の支援を受けて、部分的には保守的であり、他の部分では反動的な「ヨーロッパ的」政策を擁護して戦った。ホーフバウアーの友人であり、ホーフバウアーを告白聴問司祭としたフリードリッヒ・レーゲルは、教会の政治化を警告したが無駄であった。

右派はいまや、「善人党」として名乗りをあげた。その本質的な特徴は、教会内部におけるかれらに対する反対者を、「ジャコバン派」「フランス革命の傭兵」「ヨーロッパの裏切者」として、ローマと、いまやかれらにとって近づくことができるようになった政府に告発した。フリードリッヒ・シュレーゲルは、この動きに対して、「善にあずかることはみとめるが、善人党にあずかることはみとめない。」という態度を取った。宗教的な復古を主張するこのグループはしだいに、後期のメッテルニヒ時代の政府の、政治的乃至国家的利益の道具となっ

た。

ホーフバウアーの友人と思想的な相続人からなる左派は、聖人の壮大な内面的自由を思いおこして、アイヒェンドルフが、その「聖へドヴィヒ」において、カトリック的な意味におけるキリスト教徒から要求したもの、—（時代と、その精神的かつ霊的な困苦と要請と緊密につながりを保った学問と信仰）—を実現しようところみた。

アイヒェンドルフがかばったギェンターは、この「進歩的」な運動の精神的な首脳であった。そしてギェンターの方向を受けついで19世紀と20世紀初期におけるすぐれた人物はみなおなじ運命をわかっている。かれらは、誤解され、告発され、カトリック的な思考と時代の形成からはいじまされた。

以上の小論で、わたしはアイヒェンドルフのこれまで閑却されていた側面に照明を与えることをこころみた。ドイツにおいても日本においても、アイヒェンドルフをバラ色の雲で包んで、ロマン派のうちに簡単に押し込む傾向がいまだに存在する。

このような傾向は、アイヒェンドルフの人間像を正しくとらえていないという点において誤りを犯しているばかりでなく、「善人党」的な伝統がいまだに、ヨーロッパとアメリカとにおいて存在している現状からみて、たんなる—アイヒェンドルフの解釈をゆがめるといこと以上の大きな誤りをうむのではないかとわたしには考えられる。

(了)

#### 註 釈

- 1) Joseph von Eichendorff „Anmut. Adel der Poesie.“ 65頁
- 2) 前掲書 35頁
- 3) 前掲書 同頁
- 4) 前掲書 36頁
- 5) Joseph von Eichendorff „Werke in einem

- Band" 402頁
- 6) Eichendorff „Historische literarische Schriften." 193~4頁
  - 7) „Politischer Brief. Eichendorff Werke und Schriften. Neue Gesamtausgabe der Werke und Schriften in vier Bänden. 4. Bd. 1355頁参照
  - 8) 前掲書 1294頁
  - 9) 前掲書の一篇 „über die ethische und religiöse Bedeutung der neueren romantischen Poesie in Deutschland" の428頁以降参照
  - 10) „Ästhetisches Christentum und Antichristentum." 前掲書の一篇
  - 11) 前掲書の一篇 „Geschichte der poetischen Literatur" Deutschlands の一節 „F. Schlegel" の項 (267頁) 参照
  - 12) 前掲書同篇 „Novalis" (253頁) 参照
  - 13) 前掲書の一篇 „Die heilige Hedwig" 1077頁参照
  - 14) Friedrich Heer; Land im Strom der Zeit 中の一節  
Die Botschaft eines Lebenden; Joseph Freiherr von Eichendorff" 198頁参照
  - 15) 同篇192~3頁
  - 16) „Anmut u. Adel der Poesie" 85頁参照
  - 17) 同篇 197頁
- Bibliographie**
1. Eichendorffs Werke
    - 1) Joseph Freiherr von Eichendorff. Neue Gesamtausgabe der Werke und Schriften in vier Bänden. (Cotta.)
    - 2) Sämtliche Werke des Freiherr von Joseph Eichendorff. Historische-kritische Ausgabe. (Joseph Habel)
    - 3) Joseph von Eichendorff. Werke in einem Band. (Hanser.)
    - 4) Joseph Freiherr von Eichendorff; Historische und literarische Schriften. Besorgt von Reinhold Schneider. (Bergland.)
    - 5) Joseph Freiherr von Eichendorff Anmut und Adel der Poesie : Aus den Schriften zur Literatur. Ausgewählt und eingeleitet von P. Stöcklein.
      2. Literatur über Eichendorff.
        - 1) Reinhold Schneider; Eichendorffs Weltgefühl. (Aus „Dämonie und Verklärung.") (Bergland.)
        - 2) Friedrich Heer; Die Botschaft eines Lebenden: Joseph Freiherr von Eichendorff. (Aus „Land im Strom der Zeit. (Herold.)
        - 3) Friedrich Heer; Der Konservative und die Reaktion. (Vus „Die neue Rundschau." 69. Jahrgang. 1958)
        - 4) Reinhold Schneider; Eichendorff; (Ein Abschnitt aus „ Vom Geschichtsbewusstsein der Romantik.)